

(講演要旨)

皆様、はじめましてこんにちは。

私は、長崎県対馬市上対馬町で大型定置網漁業会社の代表取締役をしている久保幹太 (くぼ かつ) と申します。

会社名は、日昇漁業 (ニッソウギョギョウ) 株式会社といい、5年ごとに更新される長崎県知事免許の大型定置網漁業権を所属する上対馬町漁協との共同漁業権を行使して経営を行っております。※漁夫8人、出荷作業4名女性 (増減あり、私と妻含む)

私は、東京出身で2005年夏に漁業就業支援フェアでの応募をきっかけに、その年の12月 (当時33歳、元・電気設計エンジニア) に大韓民国との国境離島である対馬にIターン転職移住いたしました。

2013年10月に「合名会社日昇漁業」から「日昇漁業株式会社」に組織変更し、その年11月 (当時41歳) に代表取締役に就任いたしました (他人間事業承継)。

弊社の主要な漁獲魚種は、スルメイカ、ケンサキイカ、ブリ、ヒラマサ、サワラ、アオリイカ、マアジ、マサバ、マダイ、イシダイ、クロマグロ、スマガツオ、ソウダガツオ、イサキ、トビウオ、クエなど四季折々で多種多様です。

近年5年ほどで、冬場12月～2月が漁獲最盛期で年間水揚げ額の30%近くを占めていたスルメイカ (弊社ブランド: くちばし抜きメスルメイカ) の入網が急激に減少し、変わって5、6月頃に稀にまとまって群れで獲れるのみだったクロマグロが一年中 (9～11月の3か月間は自主休漁期間で除く) 頻繁に入網するようになりました。

地球温暖化の影響か、弊社定置網漁場の12月の表層海水温は2005年頃に

比べ 2~3 度上昇し 17 度以下になかなか下がらず、高値の付く年末の 10kg 超のブリの群れの来遊が少なくなったり、サワラが真冬には獲れなくなり春先に単発的に大きな群れで入るようになってきたりで季節ごとに入る稼ぎ頭となる魚種に大きな変化が生じてきています。その中で入網する総重量として増えてきているのがクロマグロです。定置網は魚群の来遊待ちの漁業のため、国境：EEZ ラインを越えて広い海域を回遊するある魚種系群の水産資源全体の増減が、入網確率および入網総重量に相関してくるものと思われます。今まで漁獲してきた稼ぎ頭の主要魚種が移り変わるのであれば、代わって入網してくるようになる魚種に対応して漁具改良や高付加価値化を行い、経営の安定化を図るのが弊社としては合理的です。しかし、世界的に太平洋クロマグロの資源量が減少しているとする科学的データをもとに、資源保護のため漁獲規制が強化されるいま、自分たちにとっては合理的な対応であっても、全体からしたら漁獲抑制に従わねばならず、僅かしかもらえない漁獲枠分を出荷できても売上額は伸びず苦しい状況です。また、クロマグロは海洋生物の食物連鎖ピラミッドの頂点に近い生物であることから、ただでさえ減ってきている主要なスルメイカや、アジ・サバを大量に捕食し、またそれらが定置網に同時に入れば、売り上げにつながらないクロマグロを優先して生存放流し、網中に残った魚を鮮度保持処理もままならず大急ぎでとって港に持ち帰り、その日の出荷制限時刻（正午頃）までに間に合わせなければなりません。

近年なにかと話題になる SDGs や持続可能な水産資源の活用ならびに生物多様性の保護を考慮しつつも、日本国民の共有の貴重な自給できる食料（たんぱく源）であり、再生産可能な水産資源から最大限に利益を生み出し、地域社

会の未来に希望のもてる存続にも貢献したいと思っています。

日本国は、世界第6位の排他的経済水域（EEZ）海洋面積を保有し、寒流（親潮、リマン海流）と暖流（黒潮、対馬暖流）が混ざり合い豊富なプランクトンの発生により、それを食べる小魚や幼魚が良く育ち、水産資源の再生産力のポテンシャルは世界有数の好漁場です。

今、日本の水産業で何が問題なのか、それは漁師のよく使う言葉、“大漁祈願”に象徴されるように、海の魚は誰のものでもなく、無尽蔵であるかのように獲ったもの勝ちで、質より量で稼ぐ、一攫千金や不漁は神頼みの成り行き任せであるかのような感覚にあると思います。また、それを聞いても何の疑問も抱かない日本国民の意識にもあると思います。

これを行動経済学で言う“共有地の悲劇”の状態（＝個々の利益の合理的経済行動を放置することにより、全体の利益の源を失うことに歯止めが利かないこと）、を放っておいた結果、乱獲が続き、サバやサンマやスルメイカといった大衆魚が激減し、いまや高級魚になってしまいました。太平洋クロマグロや二ホンウナギも同様です。

世界人口の爆発的な増加が確実であり、世界各地で干ばつや災害の頻発・極大化傾向による食糧（穀物や飼料作物など）供給の不安定性の増大、新興国の成長により生活水準が上がり、自国の食料確保のため国際競争が激化している中、日本の水産資源は国民共有の財産として大事に活用していくことの重要性を、国民自身がよく認識しなければならないと思います。

現在の日本の水産資源量の科学的・統計学的データ収集は不十分であり、国際的に通用するより高い精度で収集された（魚種ごと）資源量データをもとに

して、適切な資源管理を行えば、日本国民にとって自給でき、かつ再生産可能な貴重な食料（たんぱく源）となるのではないのでしょうか。

国民共有の財産であるとしたうえで、このまま獲りつくさないためにも、国民自身が日本の水産業に対して厳しく注目と監視をし、国民に対し最大限の利益を生み出す生産体制の確立へ舵を切らなくてはなりません。

漁業には、まき網（組織）、底引き網（組織）、一本釣り・はえ縄（個人）、定置網（組織）、刺し網、引縄、かご漁、養殖、海藻・貝類採取など、多様な漁法があります。

特に、大型のまき網や底引き網などは大臣許可制ですが、個人の漁師の船とは比べ物にならない大きな船（船団）で最新の漁労機器などを用い、一度に大量に漁獲する能力を持っているため、一日で数100トンも水揚げすることが可能です。そして、それらが出荷される日本各地にある鮮魚市場などでの相場は、需要と供給の関係で相場が大きく変動しています。

例えば、12月に10kgを超えるようなよく太った脂乗りの良い立派な寒ブリを個人の漁師が危険と寒い思いをして大事に獲ってきて、市場に送りさぞや高く売れる（¥2,000～3,000/kg）と思ったら、同じ日に大型まき網などが、100トン（10万kg）取ってしまえば、供給過剰で相場は¥500/kgに下がってしまうこともあります。

1尾¥2～3万稼げると思っていたものが、¥5,000になってしまえば、大赤字です。かたや、大型の方は、¥500/kgでも（×10万kg）一晩の操業で¥5,000万の水揚げ額になりますので、通常より安くても大きな利益が出ることは想像できます。

地方や離島で個人や少人数で専業にて生計を立てている漁師は、10年以上も前から経済的に成り立たなくなってきました。所得水準が低いいため後継者がおらず、就業人口も減る一方で生産の人的パワーやノウハウも消え去ろうとしています。

それは(多品種少量生産の)高級な旬の魚を最大限の鮮度保持処理を施して、1尾1尾大事に獲る職人技の伝承情報も途絶えて、リセットされていくこととなります。世界に誇る和食の大事な食材の供給も、質より量の画一的な品揃えばかりになれば、食文化の多様性も失われます。

日本国政府(水産庁)が、各漁法や経営規模の大小に関わらず、経営体それぞれが経済的に成り立つ競争機会を持たせ、住み分け・共生していくための導入した規制がIQ(個別漁獲枠)やITQ(譲渡可能漁獲枠)です。現状では太平洋クロマグロ漁獲枠は大臣許可の大中まき網と沿岸漁業者とで大別してその中から割り当てられていますが、日本の全体の総生産額が大きくなるように、そして、地方の零細な漁業者が廃業せずに済むような保護する政策がもっと議論され、包括的に漁獲枠の融通が利くようになってほしいと思います。

ノルウェーやニュージーランドの漁業のようなリアルタイムな情報共有システム化(漁獲量・相場)や、サプライチェーンの信頼性(適正な漁獲監視、と流通)を持たせIUU漁業(違法・無報告・無規制)を撲滅し、外貨をも稼げるような成長産業に大転換していくことを望んでいますし、未来の世代に対する重大な責任が私たちにはあると思っています。

漁業：営利を目的として魚介類を捕獲したり養殖する産業のこと  
水産業：水産物を捕獲・養殖・加工などで取り扱う産業のこと